貞佐点「指南車の」百韻註解（一）

稲葉有祐、荻原大地
小林俊輝、ビュールク トーヴェ

本稿では、東京大学総合図書館洒竹文庫に所蔵される『貞佐点俳諧帖』「指南車の」百韻のうち、発句から二十五句目までを註解する。本資料は享保十三年〈一七二八〉十二月十四日、前年に没した有紀堂佳風の追懐を込めて催されたもので、役者・芝居関係者が多数参加している。批点をした江戸座の貞佐は役者と親交の深い俳諧師であり、本資料を註解することによって、享保期における俳諧と歌舞伎との接点を考察することができる。ひいては、江戸文化のあり方を知る重要な視座を据える意義を持つものとなろう。

俳諧　歌舞伎　享保　貞佐　役者

享保期は「役者の俳諧が鮮烈な世界を描き出した時代」[1]とされる。元禄期に其角や初代市川團十郎・中村七三郎・中村伝九郎らによって紡がれた江戸俳壇と梨園との親交は次世代に引き継がれ、新たに結成された江戸座（江戸の俳諧宗匠組合）の俳人達と役者達との間で雅交が結ばれていく。服部幸雄氏[2]が「俳諧と歌舞伎はともに江戸時代の都市を基盤にして成立した芸能としての側面をもっている」とした上で、興行される「座」の文芸としての俳諧の「芸能的性格」に言及し、「俳諧と歌舞伎は共通の美意識に支えられていた」と述べるように、両者の接点を考えることは、江戸文化のあり方を知る重要な視座を据える意義を持つといえる。ただし、伊藤善隆氏[3]が指摘するように、俳諧研究上、歌舞伎との接点を主要な課題とされた機会は必ずしも多くはなく、その具体的な活動について、明らかにすべき事柄は依然として残っている。

そこで本稿では、東京大学総合図書館洒竹文庫に所蔵される『貞佐点俳諧帖』「指南車の」百韻を註解し、役者達の交流と「鮮烈な世界」の内実を考察する礎としたい。まず、以下に同書の書誌を示す。

所蔵　東京大学総合図書館洒竹文庫。文庫整理番号：洒3492。
　請求記号：A00：洒竹：3492。
装幀　写本。点帖一冊。帙入り。
表紙　二三・三糎×一七・五糎。

題簽　中央。無記。
丁数　全十六丁。
奥　「享保十三年甲三冬月中旬第四於貝錦亭催之」。
印記　「東京帝国大学図書館」、同割印、「東京帝国大学付属図書館大正五年三月卅一日　221072」、「洒竹文庫」、「東京帝国大学図書」。
備考　表紙に貼紙「桑岡貞佐点（享保十三年三月）作者暁雨。考証＝桑岡氏ノ印アリ。享保十七没、年六十三。此筆五十九ナリ」。虫損あり。

同百韻は享保十三年〈一七二八〉十二月十四日、貝錦亭で催される。連衆には、発句を詠んだ三升（二代目市川團十郎）をはじめ、少長（二代目中村七三郎）・楓晩（玉松小十郎・二代目中島勘左衛門）らの役者、狂言作者の藤橋（二代目中村清三郎）・冨百（江田弥市）・五舟（村瀬源四郎）、中村座の木戸番もしくは表役の里郷、十八大通の筆頭で一説に助六のモデルとされる暁雨（大口屋次（治）兵衛）や四時観派の莎鶏（祇明・伊藤氏。夏目成美伯父）ら役者のパトロンである札差が参加、その他、円推・佳丁・貝錦・喜者・五山・山寿・車声・宗之・潮雨・東閣・桃雨が名を連ねる。身元の判明しない者にも芝居関係者が多く含まれていると推察される。[4]

点者の貞佐（寛文十二年〈一六七二〉～享保十九年〈一七三四〉）は桑岡氏。名は永房、通称を平三郎という。其角門。初号を塩車、その後、平砂（初世）・了我とし、桑々畔とも号す。其角の点印を付嘱し、江戸座の中心的な存在となる。役者を積極的に俳諧撰集に起用した人物[5]で、二代目團十郎家の隣に居住した二世湖十（巽窓）[6]とともに歌舞伎と俳諧とを繋ぐ存在として注目される。

『貞佐点俳諧帖』には貞佐の点印が捺されている。『綾錦』（享保十七年〈一七三二〉刊）の点譜によると、「回雪」は五点、「新月色」は七点、「花影上欄干」は十点で、これらは其角伝来の印。「回文錦字詩」は十五点で、隠し点「玉姿」が十八点となる。印は「玉姿」が朱、他が銀である。『貞佐点俳諧帖』の句締には「右／妙字卅二／長十弐／貞佐　桑岡氏　貞佐之印」と記した上で、「各声五／莎鶏　倍三十四点／少長　二十八丶／暁雨　二十七丶／五舟　二十五丶／宗之　二十丶／山寿　同／東閣　十九丶／里郷　十七丶／楓晩　十五丶／佳丁　同／喜者　十四丶／潮雨　十三丶／冨百　同／桃雨　九丶／円推　同／藤橋　同／貝錦　七丶／車声　五丶／三升　発句而已／五山　一順計」と順位等が挙げられ、「享保十三年甲三冬月中旬第四於貝錦亭催之」との奥付が示されている。

百韻の註解にあたり、一回に二十五句ずつ、四回にわたり掲載する予定である。百韻のうち、本稿で扱う発句から二十五句目までの翻刻を以下に掲載する。凡例は次の通りである。

［凡例］
一、旧字及び異体字等は適宜通行の字体に改めた。
一、文字の清濁は原本通りとした。
一、振り仮名及び添削部分はすべて原本通りとした。
一、丁移りは、その丁の表及び裏の末尾において「　」を付

し、丁数とオ・ウとを括弧内に漢数字で示すことによってあらわした。

一、平点を「(平)」、長点を「(長)」、長点に朱のあるものを「(長・朱)」とし、点印は該当句の下に□で囲い、示した。

[翻刻]

有紀堂の追懐」(一ウ)

(長) 指南車のからくりゆかぬ寒さ哉　三升
(長) 硯に影の残る水鳥　貝錦
(長) 挑立る雨夜の顔のおも長に　五舟
(平) 木の端と云へ我ハ茶を挽　喜者」(二オ)
(平) 馬も人も絵の様に見る崖(ガケ)の家　楓晩
(平) 五文字浮ミ脚絆ゆるまる　山寿
(平) 風呂敷と語りハせねど月落(暮)ぬ　車声
(平) 入らぬ世話するつゞりさせてふ　執筆」(二ウ)
(平) 塗桶にはや置初し秋の霜　少長
(長・朱) 髪洗ふ日に筑波とハ知　冨百　回雪
(平) 御比丘尼の鰹節かくも世上なり　里郷
(長・朱) 十啓が来てあてる煤竹　宗之」(三オ)

花影上欄干

(平) 銭湯に長く居るのが下心　桃雨
(平) 女に舌を捲ハ惣領　藤橋
(平) かりそめの言葉の端に龍頭落　潮雨
(長・朱) 詩文ハ熨斗目歌ハ縮緬　楓晩」(三ウ) 回雪

(平) たら〳〵と枝から水へ切(ル)牡丹　五山
(平) 唐菓子持の溜(メ)る耳垢　東閣
(平) 白い事合点をしてハ白いとハ　円推
(長) 別れし夕へ汚(コ)れたる衣　佳丁」(四オ)
(平) 月花とひろちやくしたる長い文　暁雨
おもひ出してハ雉(ケ)の一声

二(長・朱) 春雨に淋しくもどる挟箱　潮雨　回雪
(長) 乳呑子ならで鞆頭抱(ク)　冨百」(四ウ)
(長・朱) 鸛の巣をおろす梯子の酔倒れ　五舟　新月色

以上、五オの一句目までを示した。本稿では発句より五句目までを稲葉、六句目より十句目までを荻原、十一句目より十五句目までを小林、十六句目より二十句目までをビュールク、二十一句目より二十五句目までを稲葉が担当した。なお、句に添削のあった場合は、添削前の句形で訳出した。

(1) 楠元六男「享保期俳壇の周縁―二世団十郎の俳諧―」(『享保期江戸俳諧論攷』新典社、一九九三年)
(2)『俳文学大辞典』(角川書店、一九九五年)「俳諧と歌舞伎」の項(服部幸雄執筆)
(3) 伊藤善隆「近世文学研究と歌舞伎―俳諧と歌舞伎―」(『歌舞伎研究と批評』第四十九号、二〇一三年五月)
(4) 本百韻の連衆については本誌掲載のビュールク・トーヴェ「佳風追善連句会参加者一考」を参照。

（5）安田吉人「享保江戸俳壇と団十郎―『父の恩』を中心に」（『成城国文学』第六号、一九九〇年三月）

（6）貞佐は二代目團十郎の日記諸本（立教大学近世文学研究会編『資料集成　二世市川團十郎』和泉書院、一九八八年）にもしばしば名が見え、享保十九年〈一七三四〉九月十二日の条には「四ツ頃湖十へ行。○噺ス。車楽ト云人居合咄ス。宵ニ湖十此方ヘ見エ今日貞佐死去のよし物語」と、その物故についての記事が載る。

（文責・稲葉）

［註解］

有紀堂の追懐

発句　指南車のからくりゆかぬ寒さ哉　三升

【季】冬（寒さ）。

【語釈】○**指南車**　車上に設置された人形が片手を上げ、常に南を指すよう作られたもの（【図Ⅰ】）。古代中国の黄帝作とも、周公作ともされる（晋、崔豹『古今注』輿服第一）。「指南車を胡地に引去ル霞哉」（蕪村『自筆句帳』）。芝居では、享保三年〈一七一八〉十一月上演「前九年鎧競」（森田座）で二代目市川團十郎門下、二代目を襲名した市川九蔵（袖岡正太郎）が「車ニ人形のせ三つ升の紋付たる、團十郎姿の人形を手ニ持」、「お聞きくだされいと指南車のせりふなが〳〵と、みぢん兄きのいき込にかわらず大大あたり」（『役者金化粧』享保四年〈一七一九〉刊）と演出に用いて大当たりを取る。○**からくり**　指南車の仕掛の意に、事がうまく運ぶようにやりくりして工夫を凝らす意を掛ける。「人間万事からくりの種／もたねども商ひ上手に生れつき」（『西鶴五百韻』延宝七年〈一六七九〉刊）。「舮伊豆日記」（享保十年〈一七二五〉正月）の上演について「ぶたい下より山越のしかけにて替り出しは」（『金の揮』（同十三年正月刊）云々と記録されるように、享保年間は舞台道具が発達した時期で、実験的なからくりが数多く試みられていた。○**寒さ**　寒気を感ずるさま。『はなひ草』（寛永十三年〈一六三六〉刊）以下に十月。『通俗志』（享保元年〈一七一六〉刊）等、兼三冬。精神的な面で心に冷え冷えと染み入ることもいう。「秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるる夜ごとに　素性」（『古今和歌集』恋二）。

【句意】からくり仕掛けの指南車の人形が、手を差し上げて（暖かな南方を）指し示すようには、上手くいかない、（故人を偲ぶ、ここ最近の）寒さであるよ。

【解説】前書に「有紀堂の追懐」とある。有紀堂は享保十二年〈一七二七〉十二月十四日に没した江戸の俳人、豊島佳風。椎本才麿、後、服部嵐雪に学ぶ。『椎本先生語類』（享保三年〈一七一八〉序）において、椎本才尾の名で師才麿の説を祖述する。なお、『父の恩』（享保十五年〈一七三〇〉刊）沾洲跋文によると、才麿は初代市川團十郎（才牛）の俳諧の師とされる。「指南車」の語には、連衆を導いた佳風への思いが込められていよう。例えば、莎鶏が佳風に師事していたことについて、『五湖菴句集』（宝暦四年〈一七五四〉刊）所収「頓心法師伝」に「有記（ママ）堂に寄りて表徳を莎鶏と定む。有記（ママ）堂、是をはげまして日毎に一ツの題を出す。一日も忘る事なく、狂句三百六十句を吐事十有余年」と記される。享保十三年〈一七二八〉十二月中旬に催された本百韻は佳風の一周忌興行で、発句

には、一年を経てもなお去りやらぬ悲しみが、いかんともしがたい師走の厳しい寒さに重ねられている。

脇　　硯に影の残る水鳥　　貝錦

【季】冬（水鳥）。

【語釈】○**硯**　墨を磨るために使う道具。一般に、墨を摺る陸部と、墨や水を溜めておく海部からなる。「硯―海」（『類船集』延宝四年〈一六七六〉刊）。○**影の残る水**　「影」は水面に映って見える人や物の姿。「水」は下の水鳥にも掛かる。○**水鳥**　水辺に集まり、暮らす鳥の総称。『はなひ草』・『毛吹草』（正保二年〈一六四五〉刊）等に十一月、『増山井』（寛文三年〈一六六三〉刊）以下に十月、『温故日録』（延宝四年〈一六七六〉刊）・『通俗志』等に兼三冬。

【句意】（愛用の）硯（の海の水面）には、水鳥（即ち故人）の面影が（映るように）残っている。

【解説】発句に追懐の情と悲しみを読み取り、一方で「からくり」から『璣訓蒙鏡草』（享保十五年〈一七三〇〉刊・【図Ⅱ】）で紹介されるような「文字を書くからくり人形」を連想しながら、その姿に故人佳風の面影を重ねることで、批点を業とする点者の象徴ともいえる筆記用具を題材とすることに思い至った。中でも硯であれば面影を映す水面（「海」）があると考えたのであろう。その「海」と発句の「寒さ」とから、水辺にいる「水鳥」を詠み込んだと考えられる。なお、本百韻の会場は貝錦亭である。「客発句亭主脇」というように、主客の三升が発句を詠み、亭主貝錦が脇を務めている。三升は発句のみの入集。

第三　　挑立る雨夜の顔のおも長に　　五舟

【季】恋（雨夜（の品定め））。

【語釈】○**挑立る雨夜**　「挑立る」は盛んに張り合う意。「雨夜」は『源氏物語』帚木巻における「雨夜の品定め」をいう。五月雨の夜、物忌みのために宿直をしていた光源氏のもとへ頭中将・左馬頭・藤式部丞らが訪れ、女性の品評・理想像の議論を交わす。各自の体験談を語る中で、頭中将は常夏の女（夕顔）に言及する。○**顔のおも長に**　「おも長」は顔が長めのこと。「夕貌の甘ふて面長なる、瓢ひとつにからき世をわたるものあり／草の戸はよも汲ほさじ苔柄杓」（『古来庵発句集前編』明和三年〈一七六六〉刊）と、夕顔の実を連想させる。「雨夜の顔の」と説明するのは「夕顔の君」を読者に想起させるための表現。某院での夕顔の死後、光源氏は女房右近から夕顔が頭中将の側室だったことを打ち明けられ、彼女が雨夜の品定めで語られた女性であったことを悟る。「品定め」は『世話焼草』（明暦二年〈一六五六〉刊）に恋の詞とされる。

【句意】（理想の女性像・体験等を）張り合（いつつも、互いに語り合）った雨夜（の品定めで紹介された女性、夕顔）の顔は、（その名の通り）面長に（見えたのだった）。

【解説】「硯―紫」（『類船集』）とあるように、前句の「硯」から「紫」を連想し、さらに紫式部の『源氏物語』へと発想を転換し、「ははきぎのあまよの品さだめ、いと見どころおほくはべるめる」（『無名草子』）と評され、代表的な場面として知られる雨夜の品定

めの場面、夕顔との逢瀬の場面に思い至った。表八句で恋の句を出している。

初オ四　木の端と云へ我ハ茶を挽　喜者

【季】恋（茶を挽）。

【語釈】○**木の端と云へ**　「木の端」は木切れのこと。取るに足らないものをいう。『枕草子』第七段に「思はん子を法師になしたらんこそ心ぐるしけれ。ただ木のはしなどのやうに思ひたるこそいといとほしけれ」とある。ここでは下級の遊女、端女郎を仄めかす。○**茶を挽**　遊女に客が付かず時間を持て余す様をいう。『色道大鏡』（元禄初年成）巻一に「茶　茶を挽ともいふ。傾城のうれずして、宿にゐるをいふ也。平生さして用にたゝず隙なる者や、盲目などに、茶はひかする物なるが故に、しかいふ」とある。

【句意】木の端（のようなつまらない端女郎）と（呼ぶならば）呼べ、（どうせ）私はお茶を引いているのだ。

【解説】前句の雨夜の品定めの場面から、頭中将らの議論には名の挙がることもないであろう者に想像を巡らし、下級の端女郎を題材としながら、枕草子の措辞を踏まえて「木の端」とした。これには夕顔の家の荒れ果てたイメージが付随するかもしれない。そしてその端女郎を、人気がなく、いつも客が付かない人物と設定した。

初オ五　馬も人も絵の様に見る崖の家　楓晩

【季】雑。

【語釈】○**馬も人も絵の様に見る**　画中に描かれた、遠景に小さく見える人馬を「寸馬豆人」という。荊浩『画山水賦』に「凡画山水、意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人、遠人無目、遠樹無枝、遠山無皴、隠隠似眉、遠水無波、高与雲斉、此其訣也」とある。「王維画山水之賦　遠人无目　亦曰丈山尺樹寸馬豆人とあるを雨中の花／此雨に花見ぬ人や家の豆　晋子」（『類柑子』宝永四年〈一七〇七〉刊）。「摶に朽せぬ家々の紋　一枝／おじや往ふ寸馬豆人靄遠し　玉立」（『其角十七回』享保八年〈一七二三〉跋）。○**崖の家**　崖近くに立っている家。

【句意】馬も人も、（まるで）山水画に出てくるように（小さく）見える、崖近くに建っている家だよ。

【解説】前句の「茶を挽く」を、実際に茶葉を臼で挽く意に読み替え、その動作主を「木の端と云へ」と世間の評判には目もくれぬ隠者のこととし、世俗から離れた生活の場を、山水画に描かれるような崖近くにあると設定し、それを客観的な視点から捉えた。（稲葉）

初オ六　五文字浮ミ脚絆ゆるまる　山寿

【季】雑。

【語釈】○**五文字**　発句、平句（長句）中の最初の五音。「先師曰く、五文字に心をこめて置かば、信徳が人の代やなるべし」（『去来抄』元禄十五年〈一七〇二〉頃成）。○**浮ミ**　浮かむ。「浮かぶ」に同じ。ここでは意識に出てくる、思い付くの意。○**脚絆**　膝から下脛あたりを覆い、足を保護する布。大津脚絆、江戸脚絆、筒脚絆の三種がある。江戸脚絆は紺木綿で裏は浅黄木綿。上部に片紐を付けて、こはぜで留める。旅行や作業時に用いる。○**ゆるまる**　緩くな

る意。

【句意】（句の上）五文字が頭に浮かんで（思わず足を止め）、脚絆が緩んだ。

【解説】前句の「馬も人も絵の様に見る」から、芭蕉の「馬ぼく〳〵我を絵に見る夏野かな」（『三冊子』元禄十五年〈一七〇二〉成）句を想起し、芭蕉のような旅人を想定しつつ、山水画さながらの景を見て句案が生じた折の様子を詠んだ。

初オ七　風呂敷と語りハせねど月落ぬ　　車声

【季】秋（月）。月の定座。

【語釈】○**風呂敷**　物を包むための布。方形。ここでは風呂敷包みを背負っている商人の意。「牙婆の袱連中は両茶屋常得意」（『養漢裸百貫』寛政八年〈一七九六〉刊）。○**月落ぬ**　月が西に傾くこと。張継「楓橋夜泊」の一節に「月落烏啼霜満〻天」とある。「月」は『はなひ草』以下に八月、『通俗志』等に兼三秋。

【句意】行商人と語り合っていたわけではないが、いつの間にか夜が明けてしまった。

【解説】前句の人物が脚絆をほどき宿に逗留したと見て、宿場では行商人も多いことだろうと考え、相部屋となった状況を想定した。「月落ぬ」としたのは、前句の旅人から旅中の感慨を吐露した「楓橋夜泊」を想起したからであろう。とはいえ、見ず知らずの行商人と語り合うこともなく一人過ごし、夜明けを迎えるという表現を不自然と判断したか、貞佐は「落」を夜が更けた意として「暮」に訂正している。

初オ八　入らぬ世話するつゞりさせてふ　　執筆

【季】秋（つゞりさせ）。

【語釈】○**入らぬ世話する**　不要な世話を焼くこと。相手にとっては迷惑な行為。「草のむら〳〵花薄、何思ひ入りて招くらん。いらぬ御世話の小夜時雨」（『好色敗毒散』元禄十六年〈一七〇三〉刊、巻三の三）。○**つゞりさせ**　蟋蟀の異名。蟋蟀は「（冬を迎える準備のために衣を）綴り刺せ」と鳴くという。「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く　在原棟梁」（『古今和歌集』巻十九）。蟋蟀は『毛吹草』に八月、『増山井』以下に七月。○**てふ**　「～といふ」の変化した語。

【句意】（美しい音ながら、）「綴り刺せ」とは、余計なことを言う蟋蟀であるなあ。

【解説】前句の「月」から「虫のね」を連想し（『類船集』）、一方で前句の「風呂敷」を使い古されたものであると考えながら、前出「秋風に」歌へ思いを巡らせて「つゞりさせ（蟋蟀）」を引き出し、綻びを繕えと夜に盛んに鳴く声に辟易するとした。

初ウ一　塗桶にはや置初し秋の霜　　少長

【季】秋（秋の霜）。

【語釈】○**塗桶**　漆を塗った桶。「後に塗桶のふたに米を入てまいらせしかば」（『曾呂里狂歌咄』寛文十二年〈一六七二〉刊）。また、木製・土焼製の綿挽に用いる器具をいう。黒の漆塗りで桶に似る。「むしりわたは、塗桶に入れば、一両もはばかる」（『名語記』）。○**はや**　その時期になる前に。早くも。○**置初し**　霜が生じ始めるこ

と。「もみぢ葉をみくらの山に初霜は朝戸あけてやおきそめつらん」（『散木奇歌集』）。○**秋の霜**　立冬前に降る霜。『連珠合璧集』（文明八年〈一四七六〉頃成）に九月、『滑稽雑談』（正徳三年〈一七一三〉序）に八月。衣を打つ者の袖に置く霜として『増山井』・『をだまき綱目』（元禄十年〈一六九七〉刊）・『枝葉集』（正徳元年〈一七一一〉刊）等が「袖の霜」を立項する。「手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜」（『稿本野晒紀行』貞享二年〈一六八四〉頃成）。

【句意】塗り桶に早くも秋の霜が降り始めている。

【解説】衣を綴る意の前句の「つゞりさせてふ」から綿挽の塗桶を連想し、それを日用品の塗桶に転じつつ、その桶に秋の霜が降りるとした。

初ウ二　髪洗ふ日に筑波とハ知（しる）　　冨百

【季】恋（筑波）。

【語釈】○**髪洗ふ日**　『枕草子』第二十九段「心ときめきするもの」に「頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる」とある。『絵本十寸鏡』（延享五年〈一七四八〉刊）には「髪は頻（しきりに）あらふをよしとす。熱湯（あつきゆ）は髪をあかくしてよろしからず。程よく水を加えてもちゆべき也」とある。○**筑波**　筑波山。常陸の国の歌枕で、山頂は男体山、女体山の二峰。「音に聞く人に心をつくばねのみねど恋しき君にもあるかな　よみ人しらず」（『拾遺和歌集』巻十一）等、恋歌が多く詠まれる。

【句意】髪を洗う日に筑波山（に詠まれるような恋のときめき）を知った。

【解説】前句の「塗桶」が何に使われているのかに考えを巡らせ、「霜―黒髪」（『類船集』）の連想から、それを女性が髪を洗うためのものとし、無意識におめかしする行動から、自身で初めて恋心に気付いたとした。　　（荻原）

初ウ三　御比丘尼の鰹節かくも世上なり　　里郷

【季】恋（比丘尼）。

【語釈】○**比丘尼**　尼の姿をした私娼。ここでは熊野三所権現勧進のために諸国を巡り、後に売色を業とする者も生じた熊野比丘尼をいう。○**鰹節**　鰹の身を節どりして蒸し、火に炙って干し固めたもの。「鰹節　土佐の小なるもの、先の曲りたるよし。いきかつほを製したるもの也。よく吟味すべし」（『料理網目調味抄』享保十五年〈一七三〇〉刊）。○**世上**　世の中、俗世間の意。「Xejo xeqen（世間）に同じ」（『日葡辞書』慶長八・九年〈一六〇三・四〉刊）。

【句意】（熊野）比丘尼の（日頃食べている）鰹節は、これほどにも俗世間的なのだなあ。

【解説】前句の「髪」に注目し、「髪下ろす―若後家」（『類船集』）との連想から、前句は尼削（肩のあたりで髪を切り揃える）をして出家した若後家の動作と心境であろうと想像した。さらに前句の恋の風情から『色道大鏡』巻第十四に「在家の後家たる者、名聞にかゝはりて剃髪・禅衣の身となり、道心の比丘尼をかたらひて、法談の場を汚す輩おほかり」とあるような後家の恋、さらに尼の姿をした私娼の比丘尼へと連想を繋げ、前句の「筑波」という地名によって比丘尼の中でも地名「熊野」に所縁のある熊野比丘尼へと思

い至り、「熊野―鰹ぶし」（『類船集』）の連想から鰹節を出した。或いは、思いがけず人魚の肉を食べ、不老長寿を得た八百比丘尼の伝説を俗化したか。

初ウ四　十啓が来てあてる煤竹　　宗之

【季】冬（煤竹）。

【語釈】○**十啓**　未詳。扇の一種である中啓の誤か。「啓」は「ひらく」の意で、親骨の上端を外側に反らせてあり、たたんでもなお頭部が半開きになっているもの。主に僧や宿老が用いた。ここでは僧自身を指すか。○**あてる**　勢いよくぶつける、うちつける意。「牛童命に随て水牛に車を懸け、一鞭を当（あて）たれば」（『太平記』巻二十四）。○**煤竹**　煤払いの時に、天井等を払うのに用いる先端に枝葉のついている竹。「弓ならです、竹にしれとし忘れ　大覚院秀長」（『一本草』寛文十一年〈一六七一〉刊）。『世間胸算用』（元禄五年〈一六九二〉刊）巻一の四に「毎年煤払は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝ひ物とて月の数十二本貰ひて、煤を払ひての跡を取、葺屋根の押さへ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ随分こまかなる人ありける」とある。煤掃きは『はなひ草』・『初学抄』（寛永十八年〈一六四一〉刊）以下に十二月。『滑稽雑談』に「当世において、禁裏・院中の御煤取を始めとして、貴屋比屋の分かちなく、十二月十三日以後これをいたす。二十日には諸家の寺院にこのことを行ふ」とある。

【句意】僧が来て煤竹を当てている。

【解説】前句の「比丘尼」を熊野比丘尼から尼僧のことに見換え、その世俗な振る舞いを戒める様子、例えば坐禅の警策のように棒を当てる場面を思い描き、それに似た動作へと発想を転じて、煤竹で年末の煤払いをするとした。

初ウ五　銭湯に長く居るのが下心　　桃雨

【季】恋（下心）。

【語釈】○**銭湯**　湯銭をとって入浴させる浴場。「近所に銭湯のあるをさいはひに、ぼんのふの垢をおとして」（『新吉原常々草』元禄二年〈一六八九〉刊、巻下）。○**下心**　密かに持っている願望、もくろみ。「助六」では、遊女全員に背中を流させようと風呂に浸かりながら待って、ふらふらになったかんぺら門兵衛（門兵ヱ）が登場する。「ヱ、うぬは人を馬鹿にしやアがるか。これ、やい、このくわんぺら法王様が、御酒宴の余に、風呂に召そうとの御託宣、俺が思ひ付きは女郎を一つ所に入れて、背中を流させようと思ふハァとお請けを申した故、さつきから風呂に俺たつた一人、待てどくらせど女郎めらが、一人も失しやァがらない。俺ァ湯の中で半分溶けたわえ」（『助六所縁江戸桜』天保三年〈一八三二〉上演）。

【句意】銭湯に長く浸かっているのが、下心そのものだ。

【解説】『世間胸算用』巻一の四に「過ぎし年は、十三日に忙しく、大晦日に煤掃きて、年に一度の水風呂を焼かれし」とあるように、前句での煤払いの後には風呂に入るであろうと想像した。「当」と「風呂吹」とは付合（『類船集』）で、前句の「煤竹」からは水風呂を沸かすための竹のふいごを連想したのであろう。一方で【語釈】に挙げた「助六」の一場面に思い至り、遊廓の湯屋を設定した。

「助六」は「花屋形愛護桜」として正徳三年〈一七一三〉四月に山村座で初演、同六年二月に「式例和曽我」として中村座で上演されている。助六はともに二代目團十郎。初演の台本は残されていないが、二回目の演出は現在の「助六」に近いものであったという（佐藤仁『助六の江戸』近代文藝社、一九九五年）。

初ウ六　女に舌を捲（まく）ハ惣領　　藤橋

【季】恋（女に舌を捲（口舌））。

【語釈】○**舌を捲**　相手に威圧され、言いこめられて沈黙するさま。口舌の場面。「口舌事」は『俳諧糸屑』（元禄七年〈一六九四〉刊）に恋の詞として掲載。『猿源氏色芝居』（享保三年〈一七一八〉刊）によると、「助六」では、初演時から意休が遊女揚巻と口論し、張り合う場面があった。『助六所縁江戸桜』では「揚巻コリヤ意休さんでもない、くどい事いはんす（中略）サァ切らしやんせ。わたしにかう言はれて、よもや助けては置かんすまいがな。意休ムウ（ト切らうとする）。揚巻サァ。意休失せう。揚巻どこへ。意休助六が所へ。揚巻言い分はないかえ。意休失しやァがれ」とある。○**惣領**　一つの血族・集団等の長となるもの。ここでは男伊達の棟梁たる髭の意休を指す。

【句意】女に言いくるめられてしまうのは惣領である。

【解説】前句に「助六」の趣向を認め、今度は意休が揚巻を口説くも、相手にされず、言いくるめられる場面を付けた。

初ウ七　かりそめの言葉の端に龍頭（りゅうず）落　　潮雨

【季】雑。

【語釈】○**かりそめ**　まにあわせ、実意なくおろそかなこと。○**言葉の端**　ことばじり。「三日過ごさず大坂中へ申わけして見せふと後に知らるゝことばのはし」（『曾根崎心中』元禄十六年〈一七〇三〉初演）。○**龍頭**　釣り鐘を鐘楼の梁にかけて吊す龍の頭の形をした釣り手。謡曲「道成寺」に「人々眠れば、好き隙ぞと、立ち舞ふ様にて、狙ひ寄りて、撞かんとせしが、思へばこの鐘、恨めしやとて、龍頭に手を掛け、飛ぶとぞ見えし、引きかづきてぞ、失せにける」とある。

【句意】その場限りのおざなりな返事に、龍頭から鐘が落ちるようであるなあ（なんとも恨めしいことだよ）。

【解説】前句から、相手を口説いたものの軽くあしらわれて「舌を捲」き、意気消沈した男の心境を読み取りつつ、前句の「舌」から「大蛇」を連想（『類船集』）して、今度は歌舞伎に対して、謡曲「道成寺」を題材とすることを思い付いた。本句の「龍頭落」には「恨めしやとて、龍頭に手を掛け」（「道成寺」）とあるような、恨みがましい心境が込められる。

初ウ八　詩文ハ熨斗目（のしめ）歌ハ縮緬（ちりめん）　　楓晩

【季】雑。

【語釈】○**詩文**　漢詩文。「詩文（シブン）は深草の元政に学び、連誹は西山宗因の門下と成」（『日本永代蔵』元禄元年〈一六八八〉刊、巻二の三）。○**熨斗目**　武家の礼服。麻の裃の下に着る。練糸を縦、生糸を横にして織った絹布で織り、腰の部分だけ縞を織り出したもの。

（小林）

「武士は専ら礼服にこれを用ひ、素袍・大紋・長袖袙等の時は必ずのしめの衣服なり」、「ねりぬきは練緯にて、経生糸、緯練糸をもつて織りたるを云ふなり。その縮むをしゞらと云ひ、縮まざるを熨斗目と云ふ」、「輿のみ織筋ある物を熨斗目と云ふなり」（『貞丈雑記』天保十四年〈一八四三〉刊、巻十三）。○**歌**　和歌。○**縮緬**　女性の礼服の絹織物。経に縒のない生糸、緯に縒の強い生糸を使って平織りとし、布面に細かな縮みが生じる。「今世の女服には三都ともに縮緬を専用とするなり」、「京坂、今世、市民婦女の礼服、縮緬（縮、ちりめん、本字とす）定紋付」（『貞丈雑記』巻十六）。

【句意】漢詩文は熨斗目（姿の武士のような男性的なもの）、和歌は縮緬（姿の婦女のような女性的なものだ）。

【解説】前句の「かりそめの言葉の端」から、言葉を扱う文芸を題材にしようとし、漢詩文を男性の礼服、和歌を女性の礼服に譬えて表現した。漢字を男手、仮名を女手ということからの発想。

初ウ九　たら〳〵と枝から水へ切ル牡丹　　五山

【季】夏（牡丹）。

【語釈】○**たら〳〵**　液体が続けて滴り落ちる様子を表わす擬態語。「たらたらと朽木によだれたるひ哉　貞義」（『鷹筑波集』寛永十五年〈一六三八〉刊）。○**水へ切ル**　水切。生け花で水の吸い上げをよくする水揚げの方法の一つで、水に浸しながら草花等の茎を切ることをいう。○**牡丹**　ボタン科の落葉低木。中国原産で、春に大形で紅・紅紫・黒紫・桃・白色等の重弁花を付ける。『はなひ草』以下に四月。

【句意】枝から切った牡丹を水切りしたら、水がタラタラと垂れてくる。

【解説】前句の「熨斗目」・「縮緬」から衣服の襲の色目としての牡丹（「ぼたんの衣　表白、裏紅梅、かさねもあるべし」『滑稽雑談』）を連想し、それを花の牡丹へと転じた。一方、前句から漢詩文と和歌について議論をしている場面を想起し、そこから、くどくどと文句を並べ立てる時の擬態語でもある「たら〳〵」を思い付き、それを牡丹の花を生けている場面に当てはめて、水切の際の擬態語とした。享保期は抛入花から生花へと変化を遂げる過度期にあたっている。

初ウ十　唐菓子持の溜メる耳垢　　東閣

【季】雑。

【語釈】○**唐菓子**　唐果物（からくだもの）。奈良期に遣唐使が唐（中国）から持ち帰ったとされる菓子。糯米、小豆等の粉に甘葛煎や塩を加えて練り、丁子末・肉桂末等も入れて餅としたり、その餅をごま油で揚げたりする。『男重宝記』（元禄六年〈一六九三〉刊）巻四の五には「唐菓子の類并に樹菓」として龍眼肉・無花果・枳椇・荔枝・海松子・巴旦杏・榲桲・枸櫞・唐胡桃・阿月渾子・雪梨餻・切沙糖・天門冬漬・蜜漬類・南蛮菓子の十五種が載る。○**溜メる耳垢**　耳垢が溜まり、痒みが生じるのは吉事の前兆とされた。「耳垢のかゆみ吉事の御注進」（『住吉みやげ』宝永五年〈一七〇八〉刊）。

【句意】唐菓子を持った者が（吉例を期待して）耳垢を溜めている。

【解説】『山の井』（正保五年〈一六四八〉刊）に「からぼたん」とあるように、前句の「牡丹」から唐を連想して「唐菓子」を出し、それを持ち帰った遣唐使が論功行賞を期待して俗説を信じる様を詠んだ。

初ウ十一　白い事合点をしてハ白いとハ　　円推

【季】雑。

【語釈】○**白い事**　役者評判記での役者の位付けで、第一位の黒吉に続く第二位の白吉のこと。白吉は白抜きの吉。「黒ひ　役者評判記より出たり。吉の事也」、「白ひ　右同断。吉の事也」（『辰巳之園』（明和七年〈一七七〇〉刊）。○**合点**　承知すること。

【句意】（位付けが）白（吉）であったことを承知しつつも、（第二位の）白（吉）であったとは（どうにも納得がいかない）。

【解説】前句で吉例の前兆が詠まれたことに注目し、それはきっと第一位の黒吉と評されることを指すに違いないと期待する役者の心境を思い描き、実際には第二位の白吉であったことに、嬉しいものの期待外れで釈然としないとの複雑な気持ちを表現した。例えば、本百韻の興行と同じ享保十三年〈一七二八〉正月に刊行された八文字屋自笑版『役者遊見始』で「立役巻付上上」と位置付けられる中村七三郎（少長）が、和泉屋権四郎版『役者評判一の冨』（同年二月刊）では「立役巻付上上白吉」と評価された事例がある。

初ウ十二　別れし夕べ汚ゴれたる衣　　佳丁

【季】恋（別れし夕べ）。

【語釈】○**別れし夕べ**　恋人と別れた夕方。「今来んといひて別れしあしたより思ひ暮らしの音をのみぞなく　僧上遍昭」（『古今和歌集』巻十五）等の「別れしあした」を裏返した表現。○**汚ゴれたる衣**　汚れてしまった衣服。

【句意】（恋人と）別れた夕方は、衣服が汚れてしまった。

【解説】前句が意想外な展開を詠んでいたことに注目し、恋人と別れる時刻を朝方ではなく夕方と設定して、さらに前句の「白」に対して、例え純白の衣服であっても、夕方には汚れてしまうだろうと発想して一句をまとめた。「衣」を出したのは、明け方に恋人と別れることを「後朝（きぬぎぬ）」ということからの連想であろう。（ビュールク）

初ウ十三　月花とひろちやくしたる長い文　　暁雨

【季】春（月花）。恋（文）。花の定座。

【語釈】○**月花**　月と花。日本文化における代表的な景物。「月花はさらなり。風のみこそ人に心はつくめれ」（『徒然草』第二十段）。寵愛する対象にも用いる。「その女はひとり娘にて、日頃月花と寵愛せしに」（『男色大鑑』貞享四年〈一六八七〉刊、巻六の五）。○**ひろちやく**　広（弘）着。大げさに誇張することをいう。「だまり者名さかも立う取ツて置（澗水）／茎と仏を出してひろちやく（同）」（『半あはせ』享保六年〈一七二一〉刊）。「百里の柳いともかしこく（芳津）／ひろちやくす切帋伝は長閑にて（同）」（『露沾俳諧集』享保年間）。「勧進帳だとなづけ、なんでもかいた物をひろちやくして、よいかげんにこぢつけると」（『通増安宅関』天明元年〈一七八一〉刊）。○**長い文**　長文。長い手紙。「文づらけ高く、長

ぶんの書きて」（『好色一代男』天和二年〈一六八二〉刊、巻六の二）。「文」は『番匠童』（元禄二年〈一六八九〉刊）等に恋詞。

【句意】月よ花よと大げさに誇張している長い手紙だ。

【解説】前句の「汚れたる衣」から、この人物が身なりを気にせず、世俗を離れた生活をしていると見て、さては風雅を好む隠者かと思いを巡らせつつも、その実、大げさな似非風流人であったと捻り、その大仰な長い手紙を示した。手紙は恋文であろう。

初ウ十四　おもひ出してハ雉（虻）の一声

【季】春（雉・修正後は虻）。

【語釈】○**雉の一声**　雉はきじ科の鳥。雄は体が暗緑色で、胸及び背に紫色光がある。目の周りは赤く、黒帯のある長い尾を持つ。雉は親子の情愛の深いものとして詠まれ、例えば、野焼きの際、親自身は逃げるために飛び立っても、まだ飛ぶことのできない子を救おうと再び巣に戻り、焼け死ぬとの諺「焼野のきぎす」がある。「ち、は、のしきりにこひし雉の声」（『笈の小文』宝永六年〈一七〇九〉刊）。『毛吹草』以下に二月。同書中春に「同狩場の雉子、声をむすびては春なり」とある。『はなひ草』、『便船集』（寛文九年〈一六六九〉跋）は「雉子啼く」を一月とする。

【句意】（家族のことを）思い出しては、（親子の情の厚い）雉が一声（鳴くように慕わしく思うことだ）。

【解説】暁雨の前句にある「長い文」に着目し、「助六」で、酔い心地の中、床几に落ち着いた揚巻のもとへ、満江（助六の母）からの手紙が届く場面を想起したか。恋文から家族の手紙へと見換えている。句は、親が子を思う（あるいは子が親を思う）心境を詠んでいる。なお、貞佐は「雉」を「虻」へと添削する。「虻」は蠅に似る虫。『滑稽雑談』（二月下）に「二三月より生じて、夏月に存す。然れども古来より春に用ゆ」とある。雌は吸血性で人や動物にうるさくつきまとう。「一つぶめきて、かほのめぐりにあるを、うるさければ」（『宇治拾遺物語』巻七の五）とあるように、鬱陶しいものとされる。前句の手紙を送った人物が、全く相手にされていなかったという句意へと直したと推測される。

二オ一　春雨に淋しくもどる挟箱　　潮雨

【季】春（春雨）。

【語釈】○**春雨**　細かく静かに降る春の雨。「花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る　式子内親王」（『新古今和歌集』巻二）と、花の散る頃の物思いが想起される。『三冊子』は「春雨は小止みなく、いつまでも降り続くやうにする。三月をいふ。二月末よりも用ふるなり。正月・二月初めを春の雨となり」と、陰暦正月から二月初めに降るのを「春の雨」、二月末から三月に降るのを「春雨」と区別する。『はなひ草』以下に兼三春。『糸屑』（元禄七年〈一六九四〉刊）以下に三月。○**淋し**　本来あるべきものが失われたことによって引き起こされる悲哀・空虚感を表す。「思ふこそかへす〳〵も淋しけれあらたの面のけふの春雨」（『拾遺愚草』）。○**挟箱**　衣服等を入れる運搬用の箱。金具の環を付し、そこに棒を通して従者が担ぐ。武家の儀礼的な行装でもあり、礼服等の着替えが入れられた。女性用のものは黒無地乃至黒塗りで、油単

が掛けられる。庶民においても、富家では年始の回礼に用いた。「挿箱（ハサミバコ）往古他方に行く人、衣服を竹竿を以て僕をして之を担はしめ、寒暖の用に充つ。之を挿竹と謂ふ。近世之に拠つて挿箱を制す」（『書言字考節用集』享保二年〈一七一七〉刊）。

【句意】春雨の降る中、挟箱（だけ）が淋しく戻ってくる。

【解説】前句の「雉」から親子の情を読み取っての付け。恐らく、句の「挟箱」は娘のものであろう。親に先立ち不慮の死を遂げたか、春雨の降る中、嫁ぎ先から挟箱のみが実家に戻ってきたとした。

二オ二　乳呑子ならで鞆頭（ともがしら）抱（ク）　冨百

【季】雑。

【語釈】○**乳呑子**　母乳を飲んでいる幼児。「胸にある手をのけてのびする　季吟／乳のみ子がおもくて腰やいたむらん　長頭丸」（『紅梅千句』明暦元年〈一六五五〉刊）。○**鞆頭**　「鞆」は、弓を射る際、腕を保護するため左手首に付ける古代の武具。半月状の内部を稲藁・絹綿等で満たした革製の袋で、外を黒漆で塗り、革緒で結んだもの。「頭」は先の方の意。「産れませるときに完腕（ただむき）の上に生ひたり。其の形、鞆の如し」（『日本書紀』）と、応神天皇は生まれながらにして腕が鞆のように盛り上がっていたという。

【句意】乳飲み子でもないのに、鞆先を抱いている（筋骨隆々な姿だ）。

【解説】前句の「挟箱」の主は若い女性で、子がいても乳児であったろうと想像を巡らせ、その乳児から応神天皇の説話に思い至り、挟箱を持つ従者の屈強な姿へと視点を変えて一句に纏めた。

二オ三　鸛の巣をおろす梯子の酔倒（よい）れ　五舟

【季】雑。

【語釈】○**鸛の巣**　「鸛」はコウノトリ科の鳥。丹頂鶴に似ているが、頭頂は赤くない。また、首に黒帯がなく、背と首筋が灰色。羽は黒い。「霜月や鸛の彳々（つつつく）ならびゐて　荷兮／冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉」（『冬の日』貞享元年〈一六八五〉刊）。鳴き声は嘴を叩き合わせるような音で、青竹を割る音に譬えられる。樹木の他、「台観の上」（『本朝食鑑』元禄十年〈一六九七〉刊）や「寺院屋根」（『水谷禽譜』文化七年〈一八一〇〉頃成）等、高所に営巣することが知られる。「江戸に浅草寺の堂上、或いは本所の羅漢の堂上に巣を為す」（『飼籠鳥』文化五年〈一八〇八〉年序）。参考・久井貴世「江戸時代におけるツルとコウノトリの識別の実態：博物誌史料による検証」（『山階鳥学誌』第五十号、二〇一九年二月）。○**梯子**　寄せ掛けて高所へ昇降するための道具で、持ち運びが可能。二条の長い木材に、一定の間隔で横木を数条付けて足掛かりとする。「槙の木は霧たちのぼるはしご哉」（『玉海集』明暦二年〈一六五六〉刊）。また、次々と店を変えて飲み歩く梯子酒の意を掛ける。

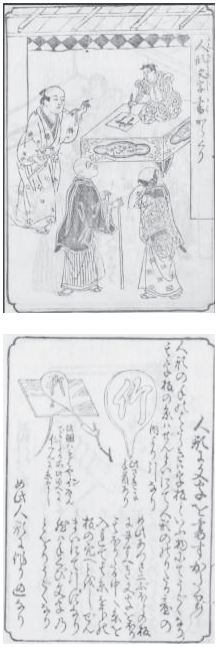
【句意】鸛の巣を降ろすために掛けた梯子が、（さも梯子酒をして）酔っ払うかのようにして倒れた。

【解説】前句の「鞆」から飛ぶ鳥を射る翔け鳥を想起し、空へと思いを馳せながら、少し捻って高所に営巣する鸛の巣を題材とすることを思い付いた。また、前句からたくましい男性を想起し、鸛の巣を撤去する作業の景を描きつつも、梯子酒の縁から、揺れて不安定な梯子の様子を酔っ払いの姿に見立てた。（稲葉）

※東京大学総合図書館には資料閲覧の便宜をお図り頂いた。記して深謝申し上げる。
※本稿は令和五年度早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点「日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸圏研究」による研究成果の一部である。

（いなば　ゆうすけ　和光大学准教授）
（おぎはら　だいち　早稲田大学助教）
（こばやし　としき　早稲田大学大学院）
（ビュールク　トーヴェ　埼玉大学教授）

【図Ⅰ】『和漢三才図会』（正徳二年〈一七一二〉成、国会図書館デジタルコレクション）



【図Ⅱ】『璣訓蒙鑑草』（享保十五年〈一七三〇〉刊、早稲田大学図書館蔵）